

物語での史実改変と歴史の語り方の地域差・変化

富士郡杉田村・恩智養宗和尚物語についての一考察

静岡県立富士高等学校2年 渡邊正太郎

はじめに

静岡県富士宮市杉田に所在する曹洞宗の古刹「安養寺」には、引水工事に関する一つの物語が伝わっている。それは、安養寺の住職を務めていた恩智養宗についての物語であり、幕末から明治初年にかけての、近世から近代への過渡期にあたる時代の話である。現在語られている物語では、養宗和尚が引水工事によって寺産を失ったことから檀家と対立して安養寺から追放されたことが軽く触れられており、その後に彼は死去したとある。

養宗和尚の物語の史実については、拙稿「口伝と史料から紐解く杉田用水物語の史実—恩智養宗和尚の光と影—」（第19回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト個人・民話部門入賞作品）においてすでに明らかにした。本稿は「物語」に焦点を当てた後続研究である。

前に述べた通り、物語中では養宗和尚が寺を追放されてからそれ以降についてはほとんど言及されていない。物語では養宗和尚の名誉回復がなされないまま彼は亡くなっているが、現在伝わっているものでは一連の檀家の対立などの人間臭さが描写されておらず、彼は一種の義人のように仕立て上げられている。

しかしながら、物語には矛盾している点がある。物語では最終的に檀家である村民と養宗和尚の確執は解消されず、彼の名誉回復はなされていなかったはずであったが、物語中では彼が義人のように描かれているのである。そして、この矛盾している点の原因は、物語の史実改変と後年の人物評価の地域差、教育者の思惑にあった。これによって、養宗和尚の人物評価が百八十度転換されていたのである。

本稿では養宗和尚の物語を収集、比較検討し、さらにそれらと史実を照合させて「物語」という媒体を通した視点から村民の彼に対する意識の変化を明らかにする。そして養宗和尚の「物語」の変遷をつかみ、村民の歴史の語り方の変化の過程とその地域差についての関係を明らかにしていく。

第1章 杉田用水の史実

1. 杉田用水の概要・沿革

本研究でテーマとした養宗和尚の引水工事によって誕生した引水機構は、一般的には「杉田用水」という名称で定着している。しかしながら、地元住民の間ではその水源地に不動堂があることから「不動水」などと呼称されている。この用水は富士郡杉田村南東部、

久沢村の枝郷であった久沢新田、天間村北東部（富士市・富士宮市にまたがる）といった地域で利用されていた。久沢新田や杉田村南東部は元禄年間に開発された富士山南麓に位置する新田集落であり、杉田用水の利用集落はもっぱら新田集落であった（表1・2）。そして、それらの集落の地下は透水性の高い富士山の溶岩層によって覆われていたため、水資源に乏しく、常に水不足の状態であった。

江戸後期になると久沢新田において安養寺の寺領内の湧水を引水するという計画が浮上し、引水設備が設けられた（史料1）。引水は主に竹樋によるものであった。その後、

〔表1〕久沢新田と周辺地域の沿革

年	事 項
戦国-江戸期	久沢新田は甲州武田氏家臣の末裔である村松氏が開墾し、その領地は厚原村から久沢新田の北端までであった、という言い伝えが残る。
元禄年間（1608-1744）	杉田村久保・笠屋敷は元禄年間に開村したといわれる。杉田新田は元禄郷帳にみられるため、同じく元禄年間に開発されたと思われる。
元禄6（1693）年	久沢新田最古の石造文化財である供養塔が建立される。これはすでに久沢新田に集落が形成されていたことを示している。
享保7（1718）年	久沢新田と杉田村の村境に建立された万霊塔に「久沢新田村 枚田新田村」と刻まれる。この万霊塔をはじめとして久沢新田と杉田村の共同で建立された石造文化財は多く残っており、両村の地縁的な繋がりが深かったことが示されている。
享保9（1724）年	久沢新田に「立石新田村六人」によって庚申塔が建立される。立石は杉田村の地名であり、さらに同時期に杉田村では小集落毎に願主六名によって庚申塔が複数建立された ³ ことから、久沢新田の一部は杉田村の人々によって開発されていたと考えられる。
安永年間（1772-1781）	甲州からの移住者により久沢新田に和光明神社が創建される ^{1・2} 。甲州の人々が久沢新田を開発していたということは、甲州出身の村松氏が久沢新田を開発したという言い伝えの裏打ちをしている。
文政5（1822）年	久沢新田に建立された馬頭観音に「大久保新田村」とみられる。大久保村は久沢新田の別称であり ⁴ 、現在は小字にその名をとどめる。
江戸後期	久沢新田は東久沢村に属する。久沢新田組が設けられ、本村とは異なる独自の村政を展開していた ⁵ 。
明治22（1889）年	久沢新田は富士郡鷹岡村、杉田村は富士郡富士根村に属する。

1 桑原藤泰/足立鞆太郎『駿河記 下巻』（加藤弘造, 1932年）p182。

2 中村高平『駿河志料（二）』（歴史図書社, 1969年）pp380-381。

3 富士宮市立郷土資料館「庚申信仰」展 より。

4 桑原藤泰/足立鞆太郎『駿河記 下巻』（加藤弘造, 1932年）p184。

5 佐野要吉『富士南麓郷土史談』（谷島屋書店, 1931年）pp168-171。

[表2] 杉田用水の沿革

年	事 項
天保5(1834)年	杉田用水の基となる竹樋による引水設備が、安養寺北方の杉田不動尊より久沢新田に敷設される。同年8月には、久沢村川久保に在住する樋世話人の室伏半蔵により水神宮が建立される。
万延2(1861)年	正月より養宗和尚によって安養寺隧道の工事が始まる。翌年夏完成。
文久3(1863)年	3月、久沢新田・久沢村の村役人らが安養寺に「差上申書付之事」を提出。内容は安養寺隧道の工事費用についての礼状であった。
明治5(1872)年	安養寺の境内に養宗和尚が「築山」という引水設備を設ける ¹ 。
明治35(1902)年	12月5日、安養寺と富士根村杉田との住民の間で杉田用水の利用の取り決めがなされる ² 。
明治36(1903)年	3月、安養寺から承認されて「富士根鷹岡水利組合」が結成される。
大正12(1923)年	久沢新田と杉田久保集落で水争いが発生。関東大震災によって水量が大幅に減少したことに起因する。
大正14(1925)年	久沢新田と杉田千貫松集落で水争いが発生。千貫松集落の人々が杉田用水の取水源付近に動力ポンプを設けて取水したことによる ³ 。
昭和10(1935)年	引水機構が孟宗竹による竹樋から土管に代わる。
昭和15(1940)年	鷹岡町において杉田用水の大改修工事が行なわれる。
昭和24(1949)年	鷹岡町域の引水機構が土管から鉄管に代わる。
昭和28(1953)年	富士根村杉田新屋敷集落の引水設備の改修工事が行なわれる。

1 恩智養宗「寺籍財産明細帳」(安養寺蔵, 1886年)。

2 「杉田用水契約書(仮題)」(安養寺蔵, 1902年)。

これを拡張したのが養宗和尚であり、杉田用水による水資源の安定供給を可能にさせた。

杉田用水は利用する各集落により、官役(カンヤク)という各集落が周期的に樋を手入れするというシステムによって管理されていた。安養寺に現存する史料(史料2)に「久沢新田樋世話人」というものがみられることから、元来は久沢新田(鷹岡村)と杉田村(富士根村)は別々で杉田用水を管理していたようであったが、明治39(1906)年3月に安養寺の承認を得て「富士根鷹岡水利組合」が結成されたことにより、杉田用水は一元的に管理されることとなったのである。水利組合の組合長には富士根村杉田久保集落の旧家出身である渡邊空太郎が就き、その下には地区毎に七名の組長が設けられた(史料3)。

地元住民によれば、杉田用水の記録は昭和中期に紛失されたといい、現存史料は限定的となっているものの、当時の村役場の公的記録(1)や石造文化財、地元住民の証言などから後年の様子を窺い知ることができる。杉田用水は養宗和尚による工事以後も、特に昭和期に拡張工事が行なわれた。昭和10(1935)年の竹樋に代わり土管を敷設する工事を始めとして、昭和15(1940)年には鷹岡町久沢北区の紀元二千六百年記念事業の一環と

して地元住民による大改修工事が行なわれたり（２）、昭和24（1949）年には鷹岡町において土管に代わり鉄管を敷設する工事が行なわれたりしている（３）。

現在、公営上水道の普及により杉田用水が生活用水として使用されることはなくなり、そのほとんどは断水しているが、富士宮市杉田字新屋敷にはいまだ通水している水道がある。

2. 安養寺隧道掘削工事と村民との対立

杉田用水の沿革において、最大のターニングポイントであったのが養宗和尚による安養寺隧道の掘削工事であった。この工事によって、杉田用水は「水大相増依之御田地下ヨリ末々迄流水有之候」(4)と、日常生活のみならず灌漑にも利用することができるようになったことから明らかなように、水量が劇的に増加したのである。

安養寺隧道の工事が始まったのは万延2（1861）年正月のことであるが（５）、これは養宗和尚が安養寺に赴任してからわずか二年後のことである。この工事には、安養寺の財政を再建するというねらいがあった。

養宗和尚（表3）は三河国の豪農出身で、駿東郡深良興禅寺にて得度、少年期を過ごした（6）。興禅寺のそばには「深良用水」という用水路があり、彼はここで引水技術を学んでいたと考えられる。養宗和尚赴任当初の安養寺は、文化13（1816）年に寺内で発生した強盗殺人事件の莫大な裁判費用によって凋落していた。安養寺の財政再建が彼に与えられていた責務であったのである。

安養寺の財政再建を進めるにあたって養宗和尚が着目したのが、寺の北方に広がる寺領の荒地であった。この荒地を水田化することで、財政再建を試みようとしたのである。これは彼が引水技術を持ち合わせていたということにもよると考えられる。

水田化するための水源として、寺領内に湧き出ている湧水を利用しようとしたが、すでにこの水源を利用した引水設備が久沢新田の村民によって設けられていた。そのため、水源の強化や隧道による用水路を設けることによって、引水設備の拡張を図ったのである。

結果的に水田化するまでの水資源は得られなかったが、荒地から畑への開発は成功して貴重な収入源となった（7）。しかし、工事費用の捻出にあたり村民に無断で境内の立木を売ったり寺宝を質入れしたりしたといわれており、一方で寺財政が好調であったことから村民に妬まれたともいわれる。

養宗和尚（安養寺）と杉田村民の檀家との対立は、明治元（1868）年に檀家らによって安養寺の寺産が毀損、散財されるという事件によって表面化することとなる。この時期には養宗和尚は浮島沼の開拓計画に熱中しており、それを戒める目的であったということも考えられる（後述）。

明治元（1868）年に発生した事件に追い打ちをかけるように、明治4（1871）年には上地令によって安養寺は無禄となってしまう。明治政府によって没収された土地には、安養寺隧道工事後に養宗和尚が自費で開発した畑も含まれていた。これについては、彼自身

[表3] 恩智養宗和尚年譜

年	事 項
文化 13(1816) 年	安養寺塔頭の滝泉寺にて安養寺前住職が殺害されるという強盗殺人事件が発生。裁判が江戸で行なわれたために出費が二千両にまでかすみ、安養寺の財政状況は「郡中屈指ノ福地」より暗転する ¹ 。
文政 5 (1822) 年	4 月、恩智養宗生まれる。出身は三河国渥美郡羽田村の豪農、鈴木家である ² 。実兄は駿東郡深良興禅寺の僧であった養仙である。
文政 12(1829) 年	興禅寺において得度。興禅寺では深良用水の引水技術を学ぶ。
安政 6 (1859) 年	長泉寺（三島市錦田）住職を経て安養寺住職となる。
万延 2 (1861) 年	正月、水源を重点的に開発した安養寺隧道掘削工事が始まる。
文久 2 (1862) 年	夏、安養寺隧道が完成する ³ 。新水源を発見し水量は増えたものの、水田化するまでに至らなかった。畑をすることには成功している ⁴ 。
明治元 (1868) 年	安養寺隧道の工事によって畑の開発を成功させたところ、村人に妬まれて「莫大ナル金額ヲ散財セシメラレ、亦素元ノ疲弊ニ戻リ一粒ノ扶食モ無キニ至リ」という状態となる ⁵ 。
明治 2 (1869) 年	この年以降、養宗和尚が浮島沼開拓計画に熱中する。
明治 4 (1871) 年	安養寺の寺領七石余が上地、無禄となり財政悪化する。
明治 7 (1874) 年	養宗和尚の度重なる嘆願により、寺領の無償返還が認められる ⁶ 。
明治 11(1878) 年	安養寺の借財は膨れ上がっており、これを返済するため「安養寺維持方法」を檀家と相談、9 月に「永続方法ノタメノ講事」が組まれる。
明治 12(1879) 年	一部の檀家役員が財政問題で養宗和尚の責任を追及し始める。
明治 13(1880) 年	1 月、安養寺から養宗和尚が追放される。本寺の保寿寺が混乱に乗じて寺宝を没収 ⁷ 。同年末に実兄の養仙和尚が借財を肩代わりする。
明治 14(1881) 年	11 月 23 日に保寿寺で発生した火災によって安養寺の寺宝が焼失。
明治 15(1882) 年	10 月、養仙和尚の協力を得て、村民と保寿寺住職を訴えた「安養寺維持方法ニ対スル妨害ノ告訴状」を県の裁判所に提出する。
明治 25(1892) 年	10 月 20 日、養宗和尚が 70 歳で死去。数年前に安養寺に帰任。
明治 35(1902) 年	12 月 6 日、安養寺と富士根村杉田の住民が養宗和尚の件で和解 ⁸ 。

1 小山忠之「岳麓拾遺 恩智養宗の周辺」（『岳南朝日新聞』，1989 年）。

2 「族籍御届」（安養寺蔵，1874 年）。

3 遠藤秀男『富士宮むかし語り』（緑星社，1975 年）pp189-190。

4 恩智養宗「駿河国富士郡枚田村曹洞宗安養寺明細帳」（安養寺蔵，1879 年）。

5 注(1) 前掲記事。

6 恩智養宗「寺籍財産明細帳」（安養寺蔵，1886 年）。

7 恩智養宗「御届書」（安養寺蔵，1881 年）。

8 「杉田用水契約書（仮題）」（安養寺蔵，1902 年）。

による行政側との度重なる折衝や嘆願により無償返還を成功させたが、安養寺の財政再建という目的により開発した畑を取り戻すための嘆願の費用が莫大な額であったため、安養寺の借財が減ることはなかった（8）。

その後も養宗和尚と杉田村民との対立は続いたと思われるが、安養寺の財政再建は一向に達成されなかったため、明治11（1878）年に安養寺の借財を返済するために「安養寺維持方法」を檀家と相談、同年9月に「永続方法ノタメノ講事」が組まれ、安養寺の財政再建問題は一応の解決をみた。しかしながら、その後一部の檀家役員の態度が急変し、財政問題について養宗和尚の責任を追及し始める。

明治13（1880）年、ついに養宗和尚は安養寺から末寺の久沢村福泉寺（曾我寺）に追放されることとなった。この混乱に乗じて本寺の保寿寺は安養寺の寺宝を持ち去ってしまい、翌年に発生した火事でそれらをすべて焼失させてしまったため、彼は一連の経緯をまとめた文書（史料4）を富士郡役所に提出している。

裁判の結果については史料が現存していないため明らかでないが、明治19（1886）年に養宗和尚の記した文書が安養寺に残されていることから、それ以前には何らかの形で杉田村民と落としどころを見つけ、安養寺に帰任していたようである。彼はその後、安養寺にて明治25（1892）年に70年の生涯を閉じた。

旧杉田村民と安養寺が最終的に和解し、ようやく紛争に終止符が打たれたのは養宗和尚の死後十年が経過した、明治35（1902）年のことであったようである。旧杉田村民と杉田用水の利用権について取り交わされた連署（史料5・6）の文中には「水源ノ沿革ヲ尋ヌル」際は、「当寺先住職恩智養宗ガ苦辛経営ノ結果堀割隧道工事ヲ落成シ…」と養宗和尚の功績を認める文脈が続く。旧杉田村民は安養寺と和解し、養宗和尚の功績を認めることによってすでに杉田用水を利用していた鷹岡村久沢と「飲用水利組合」を結成、杉田用水の利用権が保障されたと考えられるのである。

旧杉田村民と安養寺の関係が表面上では改善されたといえども、十年もの間、養宗和尚の悪評が流布していたことから、少なくとも彼の死後数十年は名誉回復がなされなかった。しかしながら、これは後述するが、時代が下るにつれて一転して養宗和尚の実績が見直され、旧杉田村民にも遺徳が認められるようになっていった。戦前・戦後には何度か慰霊祭も行なわれている。

3. 養宗和尚の性格

養宗和尚が檀家の反感を買った理由には、前に述べたように安養寺隧道掘削工事において檀家・村民らに相談せずに寺産を消費してしまったこともあるが、理由の内の一つには養宗和尚の性格というものもあったと考えられる。

養宗和尚の性格については、安養寺隧道掘削工事で寺産を勝手に工事費用として使用してしまったように、猪突猛進的な性格であった。また、彼は自らの手で工事を進めるなど、土木技術者的な性格の一面もあった。おそらく養宗和尚と檀家の対立を深めた原因が、こ

れらの性格によるものであると考えられる。この対立が表面化した時期は、彼が熱心に進めた浮島沼開拓計画の時期と重なる。

富士郡浮島沼や周辺の水田は度々水害に悩まされており、ここを開拓することは長年にわたる課題であった。養宗和尚がこの開拓計画に熱中してしまったのである。

浮島沼の開拓事業（表4）について、養宗和尚によって初めて上申が行なわれたのは明治2（1869）年のことで、設計図とともに静岡藩庁に提出された。つまり、安養寺隧道の工事が完了した直後から毎日現地へ向かって測量や実地調査を行なっていたことになる。翌年にも上申書は提出されたが、その返答はなかった。しかしながら養宗和尚はこれを諦めることができず、その後もさらに詳細な浮島沼の開拓計画を練って内務省や静岡県庁に上申している。結果的に彼の計画が陽の目を見ることはなかった。

このことから、彼は「僧」というよりも前に述べた「土木技術者」としての一面がより大きいことが明らかであるが、それ故に地元や檀家を顧みることがなかったのである。

また、養宗和尚の心情や自己評価については、彼の記した安養寺の書類の文面にあらわれており、それらによれば彼は自己評価の高い人物であったようである。明治12（1879）年12月に記され、富士郡に提出された安養寺の明細帳（5）によれば、杉田用水の記述に「萬延二辛酉年正月ヨリ廿二世祖山宗僧水源水路ヲ鑿貫シ杵田久沢ノ両村内養水ヲ潤ス」とある。杉田村民の檀家らは杉田用水の拡張によってあまり大きな利益を享受することができず、この記述がもとより工事に対して反感を抱いていた檀家の反感を買った可能性が

〔表4〕 養宗和尚による浮島沼開拓計画年表

年	事 項
明治2（1869）年	8月、養宗和尚は静岡藩庁へ上申書とともに「浮島沼開拓設計図」を提出 ¹ 。以降、彼は浮島沼開拓計画に熱中する。
明治3（1870）年	12月、静岡藩庁に上申書が提出される。浮島沼開拓に尽力した増田平四郎は養宗和尚より助言を得ていたことが記されている ² 。
明治9（1876）年	内務省土木局の官吏に熱心に構想を説いた際に称賛されたことから、11月に内務省に計画を上申する。
明治12（1879）年	富士郡役所に置かれていた養宗和尚による浮島沼開拓工事の設計図を工部大学校の教授が京都へ向かう途中に見て、「古今を通じ、数理的にこれ以上の設計なし」と絶賛される ³ 。
明治14（1881）年	3月、静岡県令に「吉原湊ヨリ富士沼近田水害除ノ儀ニ付上申」が提出され、それには平面図、開拓工事に要する費用や人夫の数などが詳細に記された予算計画の「潜渚構造概算書」も添えられた。費用は合計二万七百九十円とされたが、この計画が実現することはなかった。

1 小山忠之「岳麓拾遺 恩智養宗の周辺」（『岳南朝日新聞』，1989年）。

2 「乍恐以口上書奉申上候」（安養寺蔵，1870年）。

3 佐野要吉『富士南麓郷土史談』（谷島屋書店，1931年）p165。

ある。事実、「安養寺維持方法」について檀家の追及が始まったのは同月のことであった。この対立関係との関係性は不明であるが、養宗和尚の記した明細帳二冊には、それぞれ二ヶ所に養宗和尚、檀家惣代、杉田村戸長の署名が記入されていたものの、内一冊は養宗和尚以外の署名が切り取られている。

その後に記した告訴状にも自身の功績を記しており、その傍らで杉田村民について山辺僻地ナル故カ野蛮ノ風習」が残り「数代ノ住僧モ殆ト教化ニ困難」などと記し、強い憤りを見せている。養宗和尚が晩年に記した文書にも彼の功績が記されていることから、晩年になっても彼はそのスタンスを崩さなかったようである。

第2章 恩智養宗和尚の物語

1. 物語の概要

養宗和尚の杉田用水拡張工事は、現在まで地元では一種の「伝説」のように語り継がれている。養宗和尚の物語は昭和期に数度、書籍に取り上げられているが、それらは主に二系統に分類することができる。

いずれも養宗和尚は義人のように描かれ、彼を顕彰するような内容ではあるが、両者では決定的に異なる要素がある。まずは、『富士南麓郷土史談』（9）と『静岡県城址史』（10）にて取り上げられた養宗和尚の物語のあらすじを述べていく。

2. 『富士南麓郷土史談』

まずは、後年の杉田用水・恩智養宗和尚研究に多大な影響を及ぼした『富士南麓郷土史談』に掲載された物語の要約を述べる。物語の題名には「恩智養宗恵の清水」と付けられ、副題には「打つ鑿の 音や積りて 久澤川 恵の水は 永久に絶えせじ」（足立鋏太郎作）という和歌が付けられた。

物語は、安養寺に養宗和尚が赴任した幕末から始まる。当時、久沢新田や杉田新田の人々は、水不足のために一里も離れた小泉村の井戸まで水を汲みに行っていた。これが夜明け前からの大仕事で、ある時働き者と評判だった女性が古水溜に落ちて亡くなってしまう。その女性が「何とか水を近くに欲しいものだねえ」と最後に言っていたということを、女衆の会話から聞いた養宗和尚は、水不足の問題を解決すべく、村に水を引くことを考える。

そこで養宗和尚は、安養寺北方の不動尊から湧き出る湧水をどのようにして村々に引水するかを考えた。設計を行った結果、二町を掘割、残りを隧道とすることとなった。養宗和尚がこの大工事を始めると、杉田村の人々は噂をし始め、それが久沢新田や杉田新田の人々の耳にも入ってきた。このことに感動した村人たちは我先にと争って集まり、村人たちは岩を掘り、砂を運び、石を担いで懸命に働いた。しかしながら、養宗和尚は他人の力に頼ることが嫌いなため、村人たちに三十文の日当を渡してその後は一人で工事を行なった。

工事用具は手製の鑿一本と金槌一つであったため、工事から二年が経過していた。隧道四町は両側から掘り抜いて残りは一町となり、真ん中で突き当たるように寺の奉公人に中を掘らせ、養宗和尚は地上で音を聞くために地面に耳を当てて測った。この過程で村人に農業を奨励、村人たちには反対されたものの、寺領の田畑三十八町歩を人手に渡してしまった。工事最最後の方になると、中を照らすための蠟燭すら買うことができなくなってしまう。

そして文久2（1862）年夏、真昼時に養宗和尚はついに隧道を完成させる。その夜、折しも前日までの大雨で一層湧水が増していた不動尊の岩窟から杉田村中村まで一気に樋を掛けた。夜明け頃には水が久沢新田や杉田新田に到達、先祖代々聞くことがなかった水の音を耳にし、村人たちは「生命の父、恩智老師の犠牲的のお骨折に対して涙を流してお礼を申した」という。

隧道工事後の養宗和尚の暮らしは苦しかった。米が尽きたため、女中に大宝坊（11）へ南京米を借りに行かせたが、米屋は彼の名義では貸してくれず、仕方なく奉公人の名義で借りることができたという。明治11（1878）年には養宗和尚は寺産を失ったことについて檀家から談判を始められたため、ついに寺を後にした。世を呪うことも、恨むこともせず、諸国を十年遍歴した後の明治22（1889）年に寺に戻ってきた。その後、滾々と流れ尽きない用水路を見ながら、養宗和尚は七十歳で大往生を遂げた。

3. 『静岡県城址史』

次に、『静岡県城址史』に掲載された物語の要約を述べる。『静岡県城址史』は静岡県の城址を紹介した本であったが、本の後半は静岡県の歴史人物の紹介に割かれている。

物語は養宗和尚が安養寺に赴任したことに始まる。彼は杉田村が水不足であり、村人は時折降る雨水を頼りに、家に大きな用水池を作って蓄えていたことに驚いた。干天ならば、女衆は夜中に起きて八キロも離れた井戸にまで水汲みに行くのが常であった。この光景を見た養宗和尚は、何とかして村人たちを飲み水の不便から救おうと決心する。

養宗和尚は、富士山に降る雪や雨水は麓の地下を抜けるに違いないので、根気よく探せば漏れ出す場所があると考えた。彼は黒染めの衣に長い竹杖を持ち、水探しに夢中になる。寺周辺をくまなく探したので、檀家からは苦情や小言が噴出した。しかしながら、彼は仏の供養も大事であるが、それよりも生きている人たちに水を与えることが大切であり、仏の道にも適うものであると確信し、相変わらず水探しを続けた。

養宗和尚が乞食坊主のように痛ましい姿になった頃、安養寺の北方に位置する末寺の滝泉寺の留守居の坊主から「境内の不動堂のそばはいつも湿って乾いたことがない。」ということを知る。早速石屋から鑿を借り、十日ほど岩を砕くと水があふれ出てきた。

しかしながら、湧水源から村々までには小さい山もあり、引水するのは困難であった。その時、養宗和尚はかつて過ぎた興禅寺の周りを流れる深良用水のことが頭に浮かぶ。彼は深良用水に倣って隧道を掘り始めることにした。

隧道を掘り始める時、人夫を五人ほど雇ったが、費用は寺領の杉の大樹を売却した金で賄った。地下には富士山の溶岩層が広がり、地盤が固いことから工事は少しも捗らなかった。苦労して掘ったトンネルも一夜のうちに崩れ落ちることも再々であり、雇った者も去ってしまって結局養宗和尚一人となってしまった。それでも隧道を掘り続けたため、檀家や村人たちは気狂ったといって誰も相手にしなくなった。

それでも養宗和尚は隧道を掘り終え、杉田用水を完成させる。それまで彼を狂人扱いしていた村人たちも、ようやくその偉大さに気が付いた。久沢新田の六十戸、杉田新田の十七戸、樋先（樋崎）の二十戸、立石新屋敷の十戸、計百戸余の人々がその恩恵を享受した。

ところが喜びもつかの間、明治維新の嵐は富士山麓の山村にも押し寄せ、それに廃仏毀釈運動も相まって安養寺の寺領は取り上げられ、寺の財政は壊滅状態となる。そして檀家の攻撃は、惣代に無断で杉の木を伐採した養宗和尚に移った。彼による無断伐採は杉田用水の功績に比べれば微々たるものであったと思われるが、檀家にとっては、寺が潰れるという危機感とその自省を失わせたようであるという。

養宗和尚は「気狂い坊主をたたき出せ」ということで、明治10（1877）年に寺を追出されてしまう。追われた養宗和尚は、安養寺の末寺であった曾我寺に身を寄せた。そして、安養寺に戻ることなく曾我寺で死去する。

第3章 養宗和尚物語の考察

1. 両物語の比較

〔表5〕物語相違点の比較

	『富士山麓郷土史談』	『静岡県城址史』
村人の態度に関する叙述	自発的に養宗和尚の工事に参加するなど、協力的な態度	養宗和尚を気狂い坊主扱いし、工事には協力しなかった
物語中で詳細に述べられた部分	<ul style="list-style-type: none"> ・村人たちの会話 ・隧道工事の様子 ・村人たちの協力的な姿勢 	<ul style="list-style-type: none"> ・養宗和尚の水源探し ・養宗和尚の安養寺追放の経緯 ・村人たちの非協力的な姿勢
上記以外の主な相違点	<ul style="list-style-type: none"> ・養宗和尚を美化する内容 ・村から井戸まで一里（四キロ） ・湧水源の存在を知っていた ・工事では人夫を雇わなかった ・養宗和尚は安養寺で死去する 	<ul style="list-style-type: none"> ・比較的中立に語られている ・村から井戸まで八キロ ・湧水源の存在を知らなかった ・工事では当初人夫を雇っていた ・養宗和尚は福泉寺で死去する

以上二系統の養宗和尚についての物語の相違点を比較しているものが上に掲げた表である。表からは、双方の物語においての（杉田）村民の対照的な態度や物語中で重要視さ

れた部分、さらに細かな設定の相違点をみることができる。これらの相違点によって、物語中での養宗和尚と杉田村民との関係の描かれ方が双方の物語で大きく異なるという影響が出ている。この原因を探るためには、双方の物語と史実の比較、また双方の物語の性格を理解しなければならない。

2. 『富士南麓郷土史談』と史実の比較

同書においての記述と史実を比較した時の最大の相違点は、養宗和尚が義人のように描かれて彼の顕彰に徹底しており、人間臭さが描写されていないところにある。現に檀家については、杉田用水の恩恵を受けていて養宗和尚と良好な関係であった久沢新田や杉田新田の檀家についてフォーカスされており、彼のその後の人生が決まってしまった杉田村民の檀家との対立関係については、「明治十一年、殊更に淋しい秋の末、檀徒一同は、寺産を失ったとの故を以て老師に談判をはじめましたから、老師は遂に寺を背に、何處と當もなく旅立たれました。」という、相当柔らかい表現にされた一文のみに集約されている。また次の一文で「世を呪ふでもなく、恨むでもなく、杖にすがりつゝ衆生済度を祈り…」とみられるが、養宗和尚が実際に同時期に杉田村民の檀家について記した文章には「私ノ丹精ニ嫉妬シ徒党ヲナクシテ…」とある。養宗和尚は物語とは異なり檀家を恨んでいた。

物語全体を俯瞰すると、安養寺隧道掘削工事の目的の部分や村人たちの会話部分は脚色がみられるものの、前半部分の隧道掘削工事については史実に沿うような形で物語が展開されている。村人が工事に協力したということも、関連史料は現存していないがおそらくは史実であろう。その一方で後半部分は、養宗和尚の義人的イメージと矛盾してしまう檀家との対立はほとんど言及されていないのである。

物語中にて檀家との対立に言及されなかったことについて、考えられる理由としては前に述べた通り、この物語は養宗和尚の功績を称えるものであるから不都合が生じた、もしくはこの物語が採録された場所との檀家においては対立関係がなかった、などが挙げられる。

3. 『静岡県城址史』と史実の比較

同書は『富士南麓郷土史談』のように人間臭さが全くみられないということはなく、檀家との対立という養宗和尚の人間臭い一面も描かれている。もっとも、養宗和尚の描き方の本質は『富士南麓郷土史談』と共通しており、どちらも彼が「義人」のように描かれていることに変わりはない。

物語中において特筆すべきことは、檀家が養宗和尚を安養寺から追放したことは仕方のなかった、というような言いようであるという点にある。全体的に養宗和尚と対立した檀家らを擁護するような記述がみられる。

物語全体を俯瞰すると、前半部分は水探しの件など『富士南麓郷土史談』に見られない

脚色がみられ、史実とは乖離しているが、後半部分の養宗和尚と檀家との対立を描くところは史実に沿うような形で描かれている。物語では養宗和尚の功績を称えるという側面があるにもかかわらず、養宗和尚と檀家との対立が物語中にて言及された理由として考えられるものには、この物語が採録された場所との檀家と養宗和尚はもともと対立関係にあったため、などが挙げられる。

4. 二系統の物語が誕生した理由

養宗和尚の物語が二系統に分かれて誕生した原因としては、安養寺隧道掘削工事を実行する養宗和尚、または工事そのものに対する当時の各村檀家の立場や評価にあると考えられる。

まず久沢新田の檀家の工事に対する立場であるが、これは「差上申書之事」（史料1）よりみることができる。内容はつまり久沢新田の村役人から養宗和尚に宛てた礼状であり、久沢新田は工事によって生活用水として利用することのできる水量が大幅に増えたことから安養寺に工事費用を納めようとしたが、養宗和尚はこれを拒否しているのである。これに感謝した久沢新田側は毎年百五十人を、手弁当を持たせて寺のために働かせており、この労働力によって養宗和尚は畑を開墾したのであろう。この史料からは、養宗和尚が村民たちのことを思っているということが垣間見える。

養宗和尚と久沢新田（杉田新田）の人々との良好な関係性については『富士南麓郷土史談』中に記されている、工事を手伝う人々の様子からも明らかであり、養宗和尚に対する久沢新田側の檀家の評価は高かったことが窺える。時期は不明であるが、養宗和尚が境内の木を無断で売り払った件について檀家から一時的に寺を追われた際、久沢新田の農家で匿ってもらったといわれており、その礼として久沢新田の水利権が高く設定されている（12）ことから、久沢新田（・杉田新田）では養宗和尚は美談調に語り継がれた可能性が高いのである。

『富士南麓郷土史談』に久沢新田側の物語が採録された理由としては、同書の取材は久沢新田や安養寺にて行なわれたと考えられるためである。取材記録等は発見されていないが、同書に久沢新田の古文書が取り上げられたことや杉田用水の沿革誌（すでに紛失）を久沢新田の農家が管理していたこと、安養寺隧道の工事の際に出土した土偶を同書の校閲をした足立鋏太郎が鑑定しており（13）、安養寺との関係があったと考えられることなどが挙げられる。『富士南麓郷土史談』は後述する郷土教育の観点などから、書籍の性格的に郷土の美談を掲載する傾向が強かったことから、このような美談調の物語は取り上げやすかったものと考えられる。

久沢新田において養宗和尚の功績が美談調に語り継がれていた一方で、杉田村の本村など、養宗和尚の工事当初はその恩恵を享受することがなかった地域の檀家らの彼に対する評価は決して高いとはいえなかった。杉田用水の前身が天保5（1834）年に久沢新田側に設けられた際、もしくはその前後に杉田村側へ引水機構が設けられたかは明らかでない

が、引水機構の痕跡は発見されていないため、設けられることはなかったと考えられる。それを考慮すると、自分たちに許可もなく境内の木を伐採したり、寺宝を質入れしたりする檀那寺の暴挙ともいえる行動は到底理解しがたいものがあつたであろう。そしてこの行動は、自分たちに何も還元されるものがなく、寺が増収を図るための行動でもあつたことから、村人からの反発は必至のものであつたと考えられる。これについては養宗和尚が杉田村の人々の工事の目的を説明すれば起こらない事態であつたであろうが、『富士南麓郷土史談』の記述で人々が噂によって初めて村民が工事を行なっている事実を知ることになったぐらいであるから、事前の説明はなかったようである。

そして、養宗和尚の工事に反対していた杉田村の村人は無論工事を手伝うことはなく、これがその後の杉田用水の水利権に影響することとなったため、村人の養宗和尚への反感は募っていった。

どうやら、昭和48（1973）年に地元紙『岳南朝日新聞』の記者による地元住民への取材（14）によれば、もともと杉田村においては養宗和尚の噂として、「世話人たちがバクチをよって大損し、その穴うめに境内の杉を売った」などというものが流布されていたようであつた。その後、旧杉田村民が安養寺と和解して杉田用水を利用することができるようになったり、『富士南麓郷土史談』に掲載された物語が広まったり（久沢新田側の物語の影響を受けた）したことなどによって、旧杉田村民の檀家らが養宗和尚の功績を受容することができるようになっていったものと考えられる。『静岡県城址史』に採録された杉田村側の物語に当時の檀家を擁護するような部分もみられるのは、その成立過程が一因にあると考えられる。

このようなことから、養宗和尚の工事に賛成・反対の立場に、集落毎の安養寺の檀家が分かれたことによって、結果的に二系統の物語が誕生したものと推測することができる。

5. 養宗和尚の物語と郷土教育

前に述べた通り、杉田村側で語り継がれてきた養宗和尚の物語が、彼の悪評が目立つものから功績を称える形に変化したのは、旧杉田村民と安養寺が和解したことのほかにも『富士南麓郷土史談』による影響が大きいと考えられる。

旧杉田村において、養宗和尚の遺徳が認められるようになったのは昭和初期であるといわれているが、これは『富士南麓郷土史談』の発行された昭和6（1931）年の時期と重なっている（15）。

『富士南麓郷土史談』の著者は、当時小学校教員を務めており、杉田村の隣村である大岩村箕輪（三ノ輪）出身であつた佐野要吉（生没年不詳）、校閲は静岡県史編纂委員の足立鉄太郎（1867.2.10－1932.11.18）であつた。佐野は考古学者でもあり、「岳南考古学会」創始メンバーの一人で、富士宮市大岩の箕輪A遺跡内に生家があつた。箕輪遺跡はこのことによって早い時期から中央学会にも知られ、「岳南三大遺跡」として自治体史に貴重な史料を提供している。佐野は他にも岳南地域の数多くの遺跡を発見している（16）。戦後

は新制中学校の校長を務めた。足立は松江藩士の家に生まれ、他県で教鞭をとったのちに明治45（1912）年に静岡県賀茂郡立中学豆陽学校長に就任。大正12（1923）年4月に島田高等女学校を経て教職を退いている。教職時代には静岡県の郷土研究を行っており、そのことから後に静岡市史編纂課長や静岡県史編纂主事を命ぜられ、郷土研究に没頭している。その功績から、静岡県の郷土研究の基礎を築いたといっても過言ではないといわれる（17）。

同書が発行された時期は郷土研究・教育の高揚期であり（18）、静岡県では足立鋏太郎の編纂による『静岡県史』が発刊され、富士郡においては静岡県立富士中学校（現静岡県立富士高等学校）の編集による『富士郡郷土教育資料』第一輯が昭和8（1933）年5月に、第二輯が翌年3月に発刊されている（18）。同書は「富士郡教育研究会」の事業であり、当時の富士中学校長三輪笹市の記した序文によれば、

「…此は本校職員の研究調査、又職員指導の下に生徒をして調査せしめた資料や郡下各方面に調査を依頼して得た資料等から精選して取纏めたものである。誠にさ、やかな小冊子ではあるが、此に干与した人員は数百という夥しい数に上って居り、数多の人々の美しく尊い奉仕の賜である。…」

とある。当時の富士郡において、郷土研究・教育に対しての熱の上がりようがみられる。後年には「郷土室」なるものが校内に設置された。

『富士南麓郷土史談』もこの風潮の中で発行されており、郷土教育においてその一翼を担ったことが当時富士郡教育会長であった齋藤辨一の寄せた序文よりみることができる。齋藤は序文中において、

「…今や世を挙げて郷土研究・郷土化と、郷土に親しみ郷土を理解し、真の郷土美・国体美を闡明して、国民精神の真価を弥が上にも向上させようと努力しつゝ、ある時、本書の出版を見るに至ったことは、極めて時宜に適したことでありと共に、郷土の為、延いては国家の為に大なる喜びであると確信する。是れ郡下の小学校・中学諸学校の児童生徒、引いては県下幾万の郷土愛に燃ゆる男女青年諸君は勿論、苟も子弟教養に心ある一家には是非一本を備へられるやう、敢へてお奨めする次第である。」

と、富士郡教育会が本を推奨しているということを記している。本文中にはルビが振られて、さらに簡潔明瞭な文章で子供にも読みやすいように配慮されていた（19）。齋藤自身も郷土教育を実践しており、教え子である佐野十三良は富士宮市の郷土史の大家となっているが、齋藤について「…先生は富士山の史話はよくお話して下さいました。…富士山と『かぐや姫』の話なども忘れ得ないことです。…」と回想している。齋藤は長年にわたり富士郡各小学校長を務め、文化活動に力を注いだ。大宮小学校長時代には大宮町立図書館が開館し、設立に尽力している。

以上のことから、『富士南麓郷土史談』自体が郷土教育の一環として組み込まれ、教育上「美德」が際立った養宗和尚像が教材として使用されたと考えられるが、『富士南麓郷

土史談』の養宗和尚像、つまり久沢新田側の物語が杉田地区においても児童・生徒経由で波及したものと考えられる。このことが、結果的に養宗和尚の評価が変わり、杉田村側の物語が変化していくことになる一因になったと思われる。

むすび

ここで、本稿によって明らかになったことをまとめる。

第一に、養宗和尚の物語の成立過程という点では、久沢新田側・杉田村側で養宗和尚の工事への賛否が分かれたことで、各地域での物語の成立過程が異なったこと。また、それに伴って養宗和尚の物語に地域差が生じたこと。

第二に、杉田村側で語り継がれてきた物語が途中で変化したという点では、昭和初期の郷土研究・郷土教育の高揚期に発刊された『富士南麓郷土史談』を通して、間接的に久沢新田側の物語の影響が与えられ、それが結果的に物語を変化させた一因となったということ。

第三に、現在語り継がれている養宗和尚の物語は、久沢新田側の物語とすでに変化した杉田村側の物語が基になっているために、養宗和尚の評価には地域差があったにもかかわらず、結果的に物語中の養宗和尚の評価は「義人」風の描かれ方に収束したということである。

安養寺の財政が悪化した原因は明治維新前の江戸における裁判費用であったが、それに拍車をかけたのは明治維新に伴う廃仏毀釈運動であった。この事件はその規模や村民の生活が一変したことなどから、明治維新と直接的な関係はないものの、杉田村における「維新」と言い表すことができるであろう。

以上の杉田用水と養宗和尚の物語の一例は、近世から近代への過渡期である明治維新期の地方の小村落の変化、「異質」な和尚に対する村民の考え方、廃仏毀釈運動の波及による寺の凋落の様子的一片を垣間見ることができる例ではあるまいか。

養宗和尚の物語が映し出すのは時代の過渡期に置かれた人々の様子にとどまらない。養宗和尚の物語の成立過程から、歴史を語る際の視点や立場が物語の要素に重要な部分を占めており、また物語というものは時代やそれらの影響を直接受けるような流動性の高いものであるということを改めて考えさせられる。史実検討の際には後世の流動的な評価に惑わされずに中立的観点を維持することの重要性を認識できる例ではないだろうか。

注

- (1) 「明治二十六年度歳入出予算議案・村会議事録・村会決議書」（富士市立中央図書館所蔵、鷹岡村役場文書 D-31）。
- (2) 「紀元二千六百年奉祝関係綴」（富士市立中央図書館所蔵、鷹岡村役場文書 K-28）。

- (3) 「鷹岡町久澤北區上水道紀念碑」より。
- (4) 「差上申書付之事」(史料1)。久沢新田の村役人から安養寺へ出された礼状である。
- (5) 恩智養宗「駿河国富士郡杵田村曹洞宗安養寺明細帳」(安養寺蔵, 1879年)。
- (6) 「族籍御届」(安養寺蔵, 1874年)。
- (7) 注(5)前掲史料。畑を字不動山に五反一畝歩、字寺地に二町九反三畝四歩開墾。
- (8) 恩智養宗「寺籍財産明細帳」(安養寺蔵, 1886年)には
「…安政六年ヨリ明治十五年間廿二世養宗非常ノ艱苦ヲ掌メテ開墾ナス処然ルニ明治五年上地御達ニ付キ御下渡シ願百度有餘憤発心ヲ起シ歎願ナス処終ニ詮議ノ次第ヲ以テ明治七年無代御下渡ト相成候尤モ此年度御下渡シハ無類特別ト□リ及ヒ候爰ニ於テ開墾費及ヒ願費等莫大ノ出費故ニ二分ノ負債ヲ醸シ候…」とある。
- (9) 佐野要吉『富士南麓郷土史談』(谷島屋書店, 1931年) pp154-171。
- (10) 横山武男『静岡県城址史』(静岡同好通信社, 1968年) pp205-208。
- (11) 杉田村、安養寺西側。往時富士講の宿場として栄えたといわれる。
- (12) 富士宮北高校郷土研究部「杉田用水総合調査集」(『行人塚』15, 1974年) p 39によれば、水利権の設定は久沢新田方面45%、杉田新田15%、安養寺10%、久保(杉田村中心地域)30%となっており、久沢新田・杉田新田方面が優遇されている。
- (13) 「鑑定書」(安養寺蔵, 1929年)。
- (14) 佐野記者「ルポ 恩智養宗と杉田用水(2)」(『岳南朝日新聞』, 1973年)より、杉田新梨在住、明治24(1891)年生まれの水越栄次郎氏への取材。父熊太郎氏から伝え聞いた話であるという。新梨集落は安養寺の檀家は数軒しかなく、さらに杉田用水の利用集落でもなかったことから、養宗和尚の噂は広範囲にわたり広まっていたと考えられる。
- (15) 佐野記者「恩智養宗に学ぼう 深まる水の危機 全市民体制で取り組み」(『岳南朝日新聞』, 1988年)によれば、戦前・戦後に幾度か慰霊祭を行うようになったとあるが、「盛大に恩智養宗没後100年忌」(『岳南朝日新聞』, 1990年)や佐野記者「ルポ 恩智養宗と杉田用水(4)」(『岳南朝日新聞』, 1973年)では戦後まもなくから慰霊祭が行われるようになり、富士根村では戦没者慰霊祭に同格で合祀されて「村の功労者」として称えられたとある。
- (16) 富士宮市教育委員会『富士宮市の遺跡 一富士宮市遺跡詳細分布調査報告書一』(富士宮市教育委員会, 1993年)。
- (17) 新庄道雄／足立鋤太郎『修訂駿河国新風土記 上巻』(佐藤今朝夫, 1975年)。
- (18) 静岡県立富士中学校『富士郡郷土教育資料』(1934年)
- (19) 『富士南麓郷土史談』は考古学の論文としての側面も持っていた。さらに当時、東京帝国大学史料編纂官であった渡邊世祐の書いた序文では、
「…富士山南麓に於ける民俗的特質及び歴史的関係をば説明せんとするのであるが、

其の説く所強ひて深きを求めず、却て通俗平易の間に、克く彼の名山を背景とせる人物の行動実績を躍如たらしめてゐるのを特色とすべきである。…今やこれを郷土の誇として進んで世の青少年に伝へ、以て郷土の美を知悉せしめんと企てたのである…」

と評されている。

史料1 「差上申書付之事」(『富士南麓郷土史談』所収) 注:旧字体は常用漢字で表す。

差上申書付之事

- 一、富士郡久沢新田儀養水汲揚場所遠ク及難渋候付先年貴寺様へ御願申上御境内之湧水御不用中之定ニ而 天保五午年ヨリ当亥年迄三拾ケ年間之間 掛樋ヲ以養水御貫申来候処難有存候
- 一、貴寺様去ル年ヨリ水本御普請之儀不動尊岩窟ヲ掘込滝泉寺上之呼水石垣大樋并ニ大磐石之堀抜堀割等数百両金子御入費ニ而被遊御普請候付水大相増依之御田地下ヨリ末々迄流水有之候処右様養水願上候上ハ昨年源モト御普請入用之助成金貴寺様へ相納候而可然之处厚キ思召ヲ以而不能其儀是又難有奉存候
- 一、今般甚ダ御迷惑之段恐入候得共御寺領並ニ御境内中堀割ニ而流水御願申上候処無異議早速御聞済被成下難有仕合奉存候就而ハ中村□□□□御境内堀筋之儀大門迄間数三百五拾間之内堀割致シ何角是御迷惑之处此地代金トシテ何程歟相納可申之处何卒此分トシテ例年久沢新田中ヨリ人足而壹ケ年百五拾人宛手弁当ニ而御手伝可仕候此段御山内ヨリ御用之向御差図受貞実ニ相勤可申候云々……差送りノ失墜等無之候処諸般御慈悲之段難有奉存候
- 一、堀筋之儀折々堀浚散水等無之様可致シ并ニ御山内ヲ麓略之儀無之様相心付可申候若又……………左候ハバ其節堀筋埋置之儀如何様如仰御可仕候
- 右書面之通相違無御座候為ニ後日一連印一札仍如件

文久三癸亥年三月

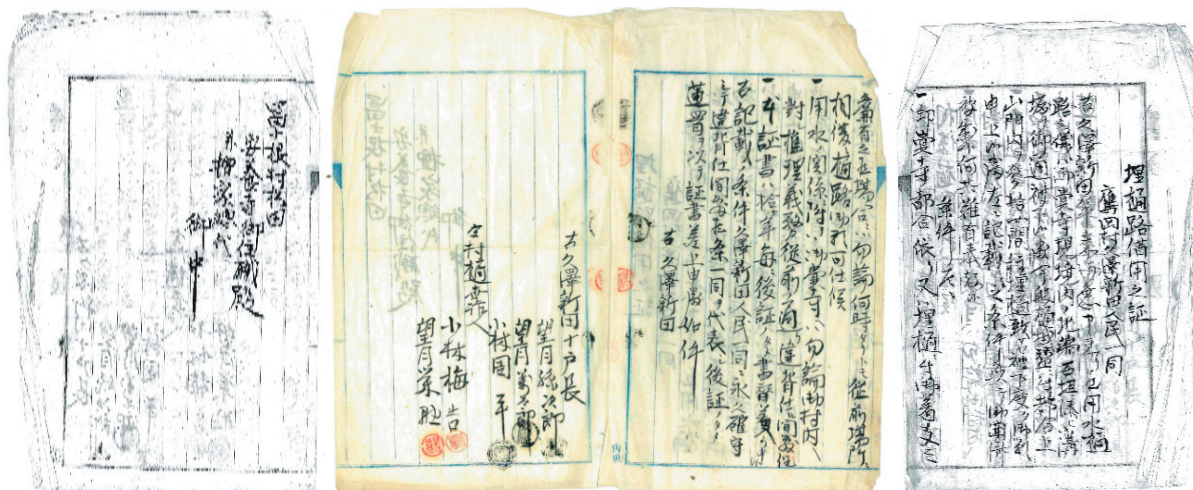
久沢新田組親総代	友 吉	⑨
同 世話人	栄 七	⑨
杉田村立会人	善 助	⑨
久沢村百姓代	市五郎	⑨
同 組頭	八十八	⑨
同 名主	勝 蔵	⑨

杉 田 村

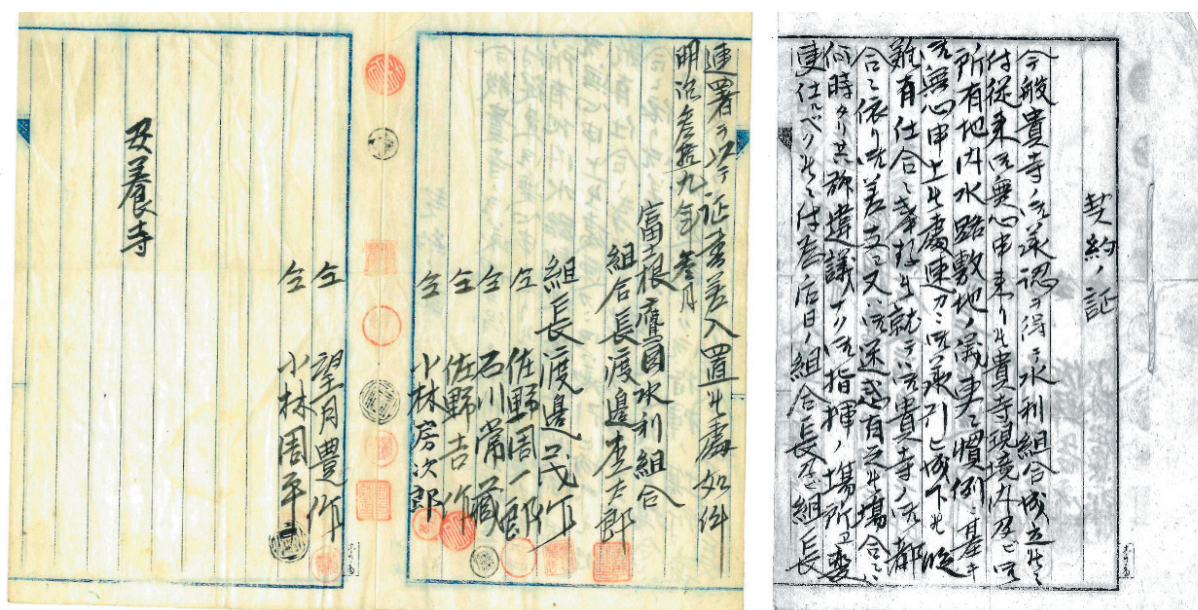
安 養 寺

御 役 寮 中 様

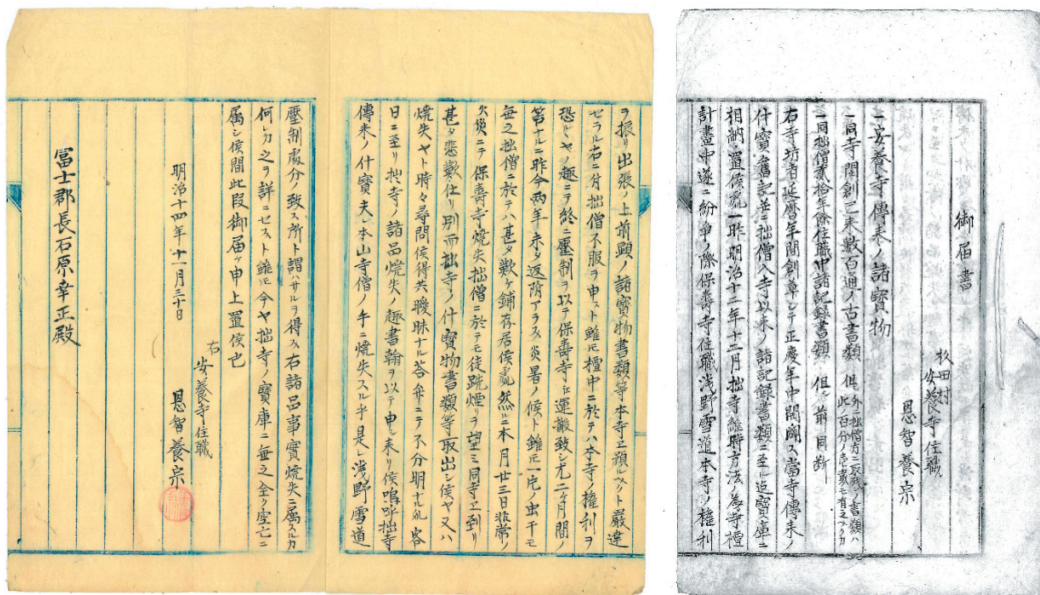
史料2 「埋樋路借用之証」(安養寺蔵, 明治中期)



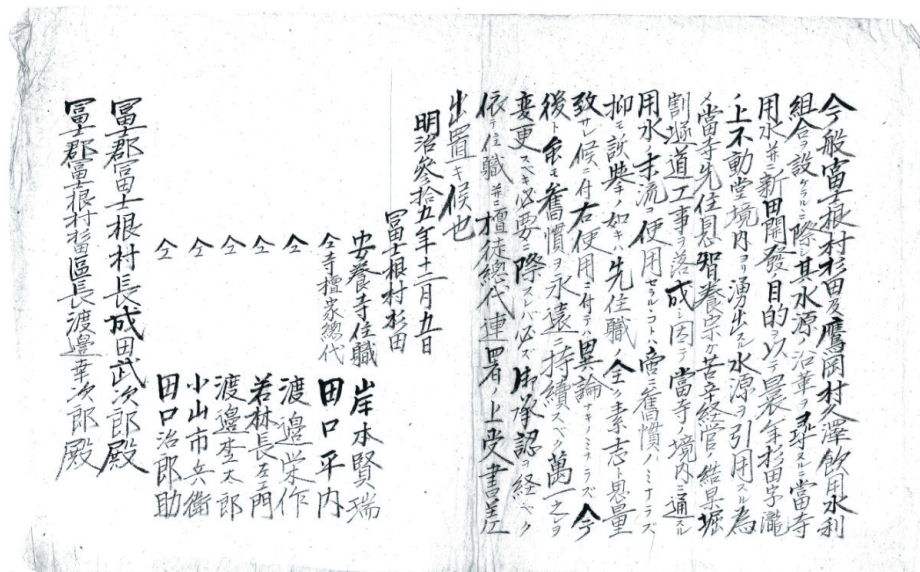
史料3 「契約ノ証」(安養寺蔵, 1906年)



史料4 「御届書」(安養寺蔵,1881年)



史料5 杉田用水契約書 (仮題)



史料6 杉田用水契約書（仮題）

今般當村杉田及鹿田久澤飲用水利組合ヲ設
其水源ノ沿革ヲ尋ヌルニ貴寺用水并ニ新田開墾ノ目的
以テ最年杉田字瀧上不動堂境内ヨリ湧出スル水源
ヲ引用スル為メ貴寺先住恩智養宗師が苦心経
管結果堀割及燧道工事ヲ落成シ因ニ貴寺境内
ニ通ル用水ノ末流ヲ使用スルニ際シ貴寺於テハ舊慣
ヲ重シ村民ノ便利ヲ謀ラシ設舉ミツキ異議
ノミナラス今後舊慣ヲ永遠ニ持統スベキ旨自來證
タル旨ハ萬一未流如何ニ變更スルモ貴寺用水ニ
ハ影響致ス間敷矣依テ茲ニ其願末ヲ書シ村長及
厩長連署上他日證書致置キ也

明治三十五年十二月五日

富十郎富根村樹鹿長 渡邊重太郎
富十郎富根村長 成田武次郎

富十郎富根村
安養寺住職岸本賢瑞殿
今寺檀家總代中

[写真] 養宗和尚肖像画（安養寺蔵）



[地図] 安養寺周辺地図（国土地理院地図Vectorをもとに筆者作成）

